

Pickup

行動を変えるために

人生の光と陰

人生の運転

対人関係の掛け算

現場の意見を引き出す

One of the Best Choices

自分を観る、自分の声を聴く

行動を変えるために

自分の行動を変えるために求められる[4つの視点]をご紹介します。

適度の危機意識：「今のままでいい」では行動は変わりません。「これではいけない」。わたしたちは、そうした[適度の危機意識]が求められます。日常でもエネルギーがなくなる前に、空腹という黄信号が出て食事を摂る行動が生まれます。

改善できることを信じる：自分の行動は努力によって改善できると信じるのが大事です。何もしないうちから、「どうせ生まれつき」「もともと性格だから」などと言っていては、変わるものも変わりません。

変わるのは自分のため：「情けは人のためならず」。人に情けをかける、思いやりある行動を取っておけば、自分も優しい配慮をしてもらえます。人のために、自己犠牲の精神で自分の行動を変えるなど長続きしません。自分が変わることで、人の態度も変わります。それで自分の気持ちよくなるのです。「行動変容は人のためならず」。

使命感：行動を変えるのは、自分の人生に与えられた使命と考えたいものです。「自分から進んで変わるのがわたしの使命なんだ」。そんな気持ちが自分を変え、他人を変え、そして組織を変えるのです。

[03/04/29]



人生の光と陰

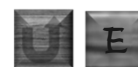
「透明人間」には影がありません。しかし、そんな人間は実在しませんから、あらゆるものには光と影があります。それが物質の最小単位の[素粒子]にまで適用できるのかどうかは知りませんが…。

ともあれ、光があるから影ができます。光が当たる方は[陽]で、影の面を[陰]と呼んでいます。中国地方の[山陽]と[山陰]はその具体的な例です。一般的に[陽面]は温かく[陰面]は寒いものです。それは太陽の温度が関係しているからです。その結果として、[陰面]は暗くなります。そして太陽が目に入るほどの位置に立って眺めると、その暗さは際立ちます。

わたしは、長野の善光寺で[漆黒の回廊]を歩いたことがあります。そのときは、「[漆黒]とはこのことか」と感動しました。そこには光がないから[影]もありませんでした。

そもそも、[影]は相対的なものです。太陽の高度が低い朝夕は[長い影]ができます。太陽が[真上]に来れば、[影]はほとんど消えてしまいます。それに、[光源]を移動させれば、「陽」が[陰]になり、[陰]が[陽]に替わります。わたしは、心の[光源]も、それをどこに置くか、それを柔軟に[移動]させることができるかが人生にとって重要なのだと思っています。

[2012/12]



人生の運転

人生は車を「運転」するようなものだと思います。それも、これから先のルートは決まっています。それは「自分」が決めるのです。

カーブの先、トンネルの向こうがどうなっているのかわかりません。それに、車は自分だけが運転しているわけではありません。前に行く車もある一方で後続車もいます。また併走する車もいるし、あっという間に追い抜いていくものもあります。そんなとき、頭にきて競争する人、「お先にどうぞ」と落ち着いている人、いろいろですね。

わたしも駐車場から出ようとする車を入れてあげることがあります。そんな優しさ(?)につけ込んで、どんどん割り込む車が入り込んでくることもあります。

もちろん対向車にも気をつけないといけません。いずれにしても道路は自分だけのものではありません。道路交通法というルールを守ることが求められます。「見つからなきゃいい」ってものではないのです。飲酒運転などもってのほかです。こうした常識を意識的、あるいは無意識的に無視する人がいます。とんでもないことです。

ともあれ、運転は「前をしっかりと見ておく」ことが基本です。それが安全な運転を保証するのです。しかし、「前だけ」では十分ではありません。「バックミラー」で「後方」もしっかり確かめながら走ることが安全運転に欠かせないのです。ただし、「後ろを見る」のはあくまで「前に進むため」に必要なからです。人生もやはり、「前を向いて進む」ことが大事なのです。

ただし、人生と車の運転には大きな違いがあります。人生には「バックギア」がついていません。いつも「バック」に気を配りながらも、しっかり「前を向いて」快適な運転を続けていきたいものです。このドライブ、自分がどこまで行けるのか、そしていつ終わるのかわかりません。だからこそ、みなさん、楽しく運転して参りましょう！

対人関係の掛け算

親と子どもが、たとえば単身赴任などで、月に数回しか関われないことがあります。わたしは、そんなときは「深さ」でカバーしましょうと[人間関係の掛け算]を提唱しています。それは[人間関係度=回数(時間)×深さ]というものです。

親が子どもと過ごす時間は少なくとも、いっしょのときはしっかり意識して「深く、深く関わる」ことで「積」は大きくなります。もう随分と前のことですが、わたしは評判の「焼きそば屋」で驚きの「読書家族」に遭遇したことがあります。それは、両親と小学生のお姉ちゃん、弟の4人でした。全員が自分の頼んだものが来るまで、「漫画や新聞、週刊誌」を読み耽っていました。そして、自分の注文品が届いても、スポーツ紙を読み続けながら食べている父親を見て、わたしは心の中で絶叫しました。「おやじい、家族と話をしろよおーっ」。これぞ、「深さ0」の典型で、いくら一緒にいる時間があっても、「積」はめでたく[0]なのです。

もちろん、この「式」は親子関係に限定されません。あらゆる人間関係に当てはまります。夫婦の間でもこの「掛け算」は十分に適用できるでしょう。ただ漫然と同じ場所に長い時間「一緒に居る」だけではまずいのです。ここで、「お前さんのところはどうか」という質問にはお答えしません。

現場の意見を引き出す

あるとき、九州のあるデパートで「父の日」の販売戦略についてトップが会議をしました。ところが、売上増に繋がるようなアイデアが出てきません。そこで、お客さんと直に接する売り場で働く女性従業員に話し合ってもらうことにしました。それまで販売戦略や戦術などとは無縁だった若い従業員たちは、大事な仕事を「まかされた」意識が高まり、しっかり議論をすすめました。その結果、「お父さん」だけでなく「お父さんのような人にもプレゼント」というキャッチコピーが生まれたのです。これだと、「お父さん」以外のお客さんも取り込めます。この戦略が見事に当たり、めでたく売りが伸びたそうです。

「父の日」の贈り物を年配のお偉いさんたちが考えても、いいアイデアが生まれるはずがありません。その点、若者たちは送る側の気持ちがわかるだけでなく、センスもいいので、作戦は成功すべくして成功したというべきでしょう。トップとしては苦し紛れの決断だったかもしれませんが、「発想の転換」をしたわけです。

テレビの刑事物で、主人公が発する「事件は現場で起きている」というセリフが流行ったことがあります。どんな活動でも、当事者の意見をうまく引き出すことで「変化」が起きるのです。さらに、自分たちの行動が評価されれば、その効果が他の領域にまで波及するのです。

[08/02/26]



One of the Best Choices

昨年、[コロナ]が猛威を振るいはじめてから、講演や研修が軒並み中止あるいは延期になりました。それでも、夏頃には、「リモートでも実施したい」というお声が聞こえてきました。わたしも[リモート化]の準備をしながら、「やりましょう」とお答えしました。その際、多くのご担当者が「本当は対面が[ベスト]なのですが、こんな状況ですから[次善]の策としてリモートにせざるを得ません」と言われるのです。

これを受けたわたしは、「いえいえ、人間は与えられた状況でベストを選択するのが正解だと思います。[コロナ禍]では[リモート]も[ベストチョイス]だと考えましょう」と申し上げてきました。

わたしは中学生のとき、`one of the most beautiful cities`という表現に出会って、「最上級は1つしかないのになあ」と疑問に思ったことがありました。しかし、成長するにつれて、これはものの見方としてすばらしいと考えるようになりました。この世に[ベスト]がいくつあってもいいではありませんか。

そして、いまや[コロナ禍]のもと、[対面]も「リモート」のいずれもが[One of the Best Choices]なのです。さあ、しっかり対応していきましょう！



自分を観る、自分の声を聴く

自分たちのことを[可能な限り客観的に評価する力]は[よりよく生きるため]に欠かせません。ここで[可能な限り]という条件は永遠にはずすことができません。

そもそも、人類の歴史の中で[自分を観た人間]は一人もいないし、これからも未来永劫その状況は変わらないのです。

こう言うと、「鏡があれば[自分が見える]」と思いますか。しかし、それは勘違いなのです。中学校の理科でも、鏡に映る像が[虚像]だと教わりましたね。「それではビデオはどうなんだ」という声も聞こえてきます。もちろん、映画やビデオの映像が[本物]でないことは誰でも知っていますよね。なんたって、あの世にいる人が[生きている]のですから。だから、鏡もビデオも、[映った人]と握手できません。

ところで自分の声はどうでしょう。こちらは自分で聴くことができます。しかし、私たちは、ほかの人たちが[自分が聴いている声]を[聴いていない]ことも知っています。だから、「わたしと同じ声を聴いていないから、みんなおかしい」と思う人はいませんよね。そうなんです。自分の[二つの声]は「どちらも正しい」のです。

地球上に人類が一人しかいなければ、[自分]という発想も言葉も生まれなideでしょう。どう考えても[他の人]たちがいるから[自分]が意識されるんですね。

[21/03/04]

